

(様式6)

視 察 報 告 書

令和7年6月24日

鳥取市議会議長 星見 健蔵 様

鳥取市議会 建設水道委員会
委員長 加藤 茂樹

本委員会は、下記により委員を派遣し、行政視察（調査）したので、その結果を報告します。

記

1 期 間	令和7年5月13日から令和7年5月15日
2 派 遣 先 及び視察 (調査) 内容	<北海道釧路市> ○地域公共交通計画について ・取り組みの内容及び経過について ・効果及び今後の方針・課題について <北海道札幌市> ○下水道科学館・創成川水再生プラザについて ・取り組みの内容及び経過について ・効果及び今後の方針・課題について <北海道室蘭市> ○地方再生コンパクトシティについて ・取り組みの内容及び経過について ・効果及び今後の方針・課題について
3 派遣委員 の氏名	加藤 茂樹、谷口 明子、足立 考史、 太田 縁、寺坂 寛夫
4 委員会所見	別添のとおり
5 参加者所見	別紙のとおり

所見

北海道 釧路市	○地域公共交通計画について ・バス交通に対する補助金は、平成17年が5千万円。平成27年が1億3千万円。令和5年が2億7千万円と増えており、本市も同じ環境と感じた。本市も早急に議論し考えていかななくてはならない問題だと思った。 ・釧路市バス乗降調査を平日3日間、全便対象にて、詳細に調査されており、そこから見えてきた課題に対して対策を講じておられ素晴らしいと感じた。鳥取市においても是非実施すべきだと考える。この調査において、通学での利用が多いことに感心した。鳥取では、通学でのバス利用は、少ないように感じる。釧路市とその部分で実状が違い、参考にするのは難しいのではと考える。 ・バス路線の幹線を軸としたバス路線網に再編で乗り換え拠点を中心に住宅地等の域内交通エリアを補完するバス路線を設定するとしており、乗り換え拠点のバス待ち時間がどのようになっているのか確認しておきたかった。鳥取市においても、そこを改善できれば効率の良いバス路線で運行可能になり、バス車両、運転手不足対策につながると考える。 ・公共交通の路線存続問題は、釧路市も本市も同様にあった。人口減少・高齢化・利用者減少・運転手不足問題によって市民の足であるバス運行が廃止される問題に対し、路線存続のための支援が高騰し、財政に大きな負担となっていること。デマンド運送、代替運送に取り組まれていることなどがあるが、釧路市の拠点設定から地域の拠点の整備(停留所の設置)にあわせて地域への結節として自宅へのドアツードア地域設定の交通対策は見習うべきものと感じた。 ・地方ではやはりショッピングモールや病院利用には自家用車利用者が多くなり、公共交通の存続は一層厳しくなることに対し、電子マネー支払い・バスイベントによる利用促進、ルートの見直し・高齢者への利用促進事業などの取り組みが酷似している。姉妹都市でもあり、将来的な人口構成や交通環境も酷似していることにより情報交換を一層強化して持続可能な交通環境の構築に取り組むべきと思った。 ・少子高齢化、人口減少と運転手不足、自動運転実現の難しさ、赤字路線への市財政からの支出負担増など鳥取市と共通する課題を多く感じた。しかし、まちづくりに関してはコンパクトシティの考え方を見直し、先ず立地適正化計画を市民に示した上で交通政策を丁寧に検討していたことは、注目に値する。計画立案において社会情勢の変化を勘案し、今後釧路市が目指すまちの姿を市民に具体的に示している点は学ぶべきと思った。交通政策のみを議論するのではなく、町全体をとらえて議論しているように感じた。JR 釧網線の存続について、JR 釧網線活性化沿線協議会事務局として沿線自治体への呼びかけ負担金の支出をするなど存続につて真摯に向き合っているように見受けた。ただ、バスを中心に公共交通を再整備しようとしているのは JR 釧網線活性化と矛盾する側面
--------------------	---

	もあり、釧路駅前での衰退を感じざるを得なかった。駅周辺にある JR 所有の広大な土地を今後どのように活用していくのか見守りたい。 ・釧路市では、地域公共交通計画の基本方針として「交通まちづくりにより、まち・ひと・くらしがつながり誰もが利用したくなる公共交通網の形成」を理念として取り組まれていた。本市と同様に人口減少と高齢化率の増加等により公共交通の課題は多々あり、それに伴うバス利用者の減少によるバス交通への市の負担額は年々増加傾向にあるようだ。対策としての取り組み状況については、公共交通網の活性化と乗換拠点の機能強化や、利用環境の整備、高齢者の利用に対する支援、生活交通の確保、圏域の交流・連携を支える広域交通軸の確保などに強力的に取り組まれていた。 ・国の補助事業で、「街路交通調査補助」(連続立体交差事業調査)で令和5年度から鉄道敷地の測量踏査、鉄道施設の概略設計、整備国かなども2年間取り組まれており、人口減少や交通量減少の中、また列車利用者減少の折、この莫大な整備が計画されており、駅周辺の街並みも多くの建物等もだんだんと老朽化している状態でもあり、これらのリニューアルやバスターミナルやタクシープールの改修を含めると、とてつもない費用と年数がかかりそうである。民間と連携してコンパクトなシティづくりが重要と感じた。本市においても現在、駅前周辺活性化事業に取り組まれているが、バスターミナルや公共駐車場も含めた将来を見据えた抜本的構想の計画による整備が必要であり大切だと痛感した
北海道 札幌市	○下水道科学館・創成川水再生プラザについて ・創成川水再生プラザに隣接する野球場の地下に池槽を設け土地の有効利用を図っておられ、誰も想像できないと思った。 ・流雪溝の整備が素晴らしいと思った。本市も取り入れるべきと思う。 (流雪溝：道路下に設置された流雪溝本体に下水処理水や河川水を送水し、道路上の投雪口から沿線住民が投雪作業を行い、水の流れを利用して雪を流す施設。) ・下水道科学館は、創成川水再生プラザに隣接し無料で入館でき、下水道の知識を楽しみながら理解してもらう広報施設。本市にもあっても良い施設と思った。 ・創成川水再生プラザでは、汚水が高度処理され再生した水が、「せせらぎ」として憩いの場として有効利用され、また、冬季には貯留管が融雪管となり、大量の雪の融雪に役立っていることなど、大変よく分かった。鳥取も大雪の際、処理が大変課題となっているが、この札幌市の取り組みを鳥取市で少しでも活用できないかと考える。 ・下水道科学館では、小さな子供からお年寄りまで、下水道のしくみや水環境の保全など、楽しく分かりやすく学べる素晴らしい施設だと感じ

	た。下水道科学館の「基本理念」に即して取り組まれ、身近に感じられるよう一つ一つ工夫されていることで、来館数を伸ばし維持されているのではと感じた。 ・脱炭素・循環型社会への貢献として取り組まれているものの中に、処理場の規模や費用対効果的に鳥取では実現が困難と思われる設備が充実している。 ・常設の「下水道科学館」は、親子で下水道の役割を身近にしてもらう教育的な施設が無料で存続が出来るほどの来場者が来られていることに驚いた。 ・下水科学館はあらゆる世代の市民に分かりやすい展示内容に工夫された説明が添えられていた。少子高齢化が加速する今日、人口減少とともに公共設備の維持更新が懸念されるが、SDGs の観点からも自分たちの住むまちのインフラがどのように維持されているのかを丁寧に説明しており、市民ばかりでなく、私たちのような来訪者にも判り易く、下水道事業について関心を持って学ぶことが重要だと改めて感じさせられた。鳥取市においても今以上に下水道整備の重要さと維持の仕組みに関心を持っていただけるよう工夫を加えるべきだと感じた。市職員をはじめこの施設の職員が親切、丁寧にご説明下さったことも印象的だった。札幌が観光地でもあるためか、あるいは多くの人々を受け入れる中で自然に育まれた市民性の結果であろうか、いずれにせよその姿勢から学ぶことは多かった。 ・大規模な処理施設に上屋をかけ、スポーツ施設や科学館などが設置されており、小中学生などの学習見学など、文字通りこどもから大人まで多くの市民が利用されており、施設の有効利用がなされていた。もちろん札幌という雪国の豪雪地帯でもあり、国の補助事業が優先的に承認されていると思うが、対策として融雪槽や融雪管、流雪溝に取り組みされており交通安全にも寄与されていた。また、高度処理についても、事業費は膨大にかかると思われるが処理水放流先の 7 つの河川でのせせらぎの川づくりで市民生活の憩いの場として利用されていた。非常に参考になり、素晴らしい施設ではあったが、本市には中々難しい事業と考える。
北海道 室蘭市	○地方再生コンパクトシティについて ・この取り組みに関しては、疑問だらけであった。夕方を過ぎれば誰も歩いていない。夜間になれば明かりもなく人も歩いていない。開いている店もほとんど無い。この町を改めて地方再生コンパクトシティへ導くには、新たな発想が必要であると感じた。とにかく今のままでは無理である。今後、応援しつつ見届けたいと考える。 ・地方再生コンパクトシティの取り組みについて、国の社会資本整備総合交付金を活用する都市生成整備計画事業に採択され、事業期間の

令和３年度までの４年間で、にぎわい創出に成功され、公共施設来館数は大幅に KPI を超え、空き店舗活用数も目標達成され、素晴らしいと感じた。ただ、令和３年以降の維持の難しさを、街を見ている中で、大変感じた。

・公共交通について、バス会社が一社で運行され、利用者が１人でもあれば運行しようとされていると聞き、感心した。鳥取でもそのような心意気を高めていければと感じた。

・公共交通についての大きな課題が運転手不足で、様々な仕掛けをされていた。鳥取でも参考になるものがあるのではないかと感じた。

・公共施設の集約として、図書館と環境科学館を合築した、「えみらん」を見学した。図書館エリアは自然光をふんだんに取り入れ、利用者が気持ちよく過ごせる工夫がされていて、素晴らしいと感じた。環境科学館エリアは、地元の自然環境を、地元企業と連携されるなどし、とても分かりやすく楽しく体感できる施設で素晴らしいと感じた。本市のさじアストロパークも、このような要素を取り入れ、より楽しく体感できる場所となれば良いと感じた。

・全国の地方自治体が抱えている都市部への流出による人口減少や高齢化率の向上は、特に第１次・第２次・第３次産業での担い手不足、人手不足問題が共通していると思われる。当然、全業種において AI 導入による労働力の効率化を図り、正規職員を非正規職員への切り替えや市有財産の売却処理・賃貸契約などの措置をしたり、老朽化した公共施設の更新の際に削減・縮小・廃止をしたりしている。この度の視察目的にした公共交通について、本市も含め視察した鉏路市・室蘭市も現状維持のための助成額が膨れ上がって継続が困難になって路線廃止・路線自体の見直し、結節拠点の考え方、広範囲を賄うデマンド交通に取り組まれたことはどことも同じ改革をされている。今後の市民の生活を安心して安全に見守るためには、コンパクトに集約していく方向性も持続可能な行政サービスの在り方かもしれない。こうした取り組みは一部ではあるが、一般会計の歳入歳出の健全化を維持することに職員の皆さんが市民、地域住民の声に応えるためのご努力に敬意を表する。

・室蘭本線乗車中車両に鹿が衝突する出来事に遭遇し、室蘭市駅で下車する予定が東室蘭駅で下車することになった。のちに室蘭市職員から説明いただいた中で、旧中心市街地が蘭室駅周辺。現在は新たな中心市街地が東室蘭駅周辺であるという説明が瞬時に理解できた。市役所周辺の商店街には空き店舗が目立ち、どのあたりを中心市街地といったのか判らなくなってしまっているように感じられた。市議会事務局長より室蘭市の概要についてご説明いただいたが、まちの歴史をお話いただき、その中でも明治の時代、空知炭鉱の町からの鉱物を運ぶ岩見沢～室蘭を結ぶ鉄道が敷設され室蘭は物流の拠点となっていたこと、鉄のまちとして栄えた様子を熱心に話してくださったことがとても興味深かった。「えみらん」を見学し、施設に対して、大学との連携がもともとに強く、数

多くの企業の協力が得られていることがよく理解でき、我が国のものづくりの歴史と力強さを感じた。中心市街地の様子は少子高齢化や人口減少などにより、その姿を大きく変えつつあるが、まちの背景として、鉄鋼業のまちとしてのものづくりのまちとしてまちが繁栄してきた底力と先人の偉業をたたえ、室蘭の歴史を室蘭市民はもとより多くの人々に再認識させ得る場所になり得ると痛感した。中高生の修学旅行に最適ではなかろうか。北海道最古の木造駅舎も事務局のご配慮により見学する機会を得た。この駅舎、3代目だったというが、明治末期・大正元年(1912)の建物で平成23年(2011)まで使われていたという。この駅舎公園には科学館で長く保存されていたS L-D51が移設され、屋根付きの立派な建屋の中に展示されていたが、飾っておくだけではもったいないように思えた。

・タクシーやバスの運転手不足が鳥取市や釧路市と同様に重要課題となっているが、鉄道の利用を促進する取り組みが不十分に思われた。このことは鳥取市においても同様だが、先ず手持ちの資産を活用することが重要ではないかと思われた。室蘭へは釧路から根室本線で札幌を経由して訪問した。釧路・札幌・室蘭は北海道でも知られているまちであるが、車窓から見る沿線は、牧場や農地と宅地化されていく土地とが混在していた。

・中心市街地活性化などという言葉は、日本全国を飛び交い、地方再生を推進しているように見えるが地方都市は本当に大変な局面にある現実を突きつけられたように思う。室蘭市は、平成30年、地方再生コンパクトシティのモデル都市として選定された33都市の一つである。まちとしての再起をかけた計画の推進が鍵を握っている。しかし、衰えたとは言え未だ活動している鉄鋼業があり、かつての炭鉱産業のお陰で整備された鉄道網と関連産業の歴史がまちの礎にある。これらが総力を挙げれば再生の展望は十分あるものと期待される。今後の展開を見守りたい。鳥取のまちはどうであろうか。今一度考える時期ではなかろうか。

・室蘭に到着した時の街中の印象は、ほとんどの店(土産物屋、飲食店・商店)でシャッターがしまっており、建物も老朽化していて、中には倒壊寸前の建物もあり、十数年以上も前から寂れて活気がないように感じた。そのような中で室蘭市では地方再生へのコンパクトなまちづくりへと向かわれており、その取り組みとして、国の補助事業による公共施設を中心とした更新事業によりで市民への賑わいづくりを実現されていた。しかし、現状では、観光客向けの商店街や飲食店などの店舗が少ない状態であり、この課題対策として民間主導によるまちづくり、にぎわいづくりの取り組みでの活性化が必要であると感じた、もちろん、民間の発想や計画の実現に向けて、行政側である室蘭市の強力的なサポートが重要であると感じた。このことについても本市においても空き店舗の増加傾向にあり、官民連携の取り組みが大切だと痛感した。